2

Like 0　ポスト

山の暮らしの現場を訪れて

林業の取材で山間部を頻繁に訪れてはいても、山奥に人が住み暮らしている現場を目にするたびに、私はある種の感動を覚えてしまいます。それはこんな山奥に人が暮らしていることに対する単純な驚きであったり、周囲には自然以外にほとんど何もないような環境で日々の営みを可能にしている知恵や技術に対する畏敬の念であったり、そのような暮らしが何世代にもわたって続けられてきたことに対する頭が下がるような思いであったりと、ひと口には言い表せないものなのですが、身内の深いところからもお起こってくる感興とでも言うべきもので、そのような暮らしの現場を前にすると、心を動かされるのをとどめることはできません。

インノシ姿の支度。暮らしなりの幸が暮らしを支えてきた

「山奥の集落」を私が最初に意識したのは学生時代にオートバイで東北を旅していた時のことでした。この先に小さな集落があり、そこにいい温泉があると地元の人から教えられた方角にバイクを走らせました。もんなに急ではない登り道は両側から森が迫り、だんだんと細くなるようで行けば行くほど心細さが増してきます。この先に人が暮らしているようなところがあるのだろうかという不安が胸の奥も頭をもたげ、やっぱり引き返そうかと思ったのも一度や二度ではありませんでした。そうするうちに森が開けてだより暮らした集落の温泉では、農作業の汗を流す人たちの筋骨たくましさに圧倒され、なまっちょろい自分の身体が恥ずかしく、早くよそ者であるようなことと以上に居心地の悪い思いがしたものです。今思うと、自然の真っただ中で身体を使って住み暮らすことの真実とでも言うべきものの片鱗に触れ、都会者として抉めたさを感じていたのかもしれません。

また、これは林業の取材に従事するようになってからのことですが、人気のない山奥の道を誰かに運転してもらって車で移動していたときのことです。確か四国だったと思いますが、夕暮れ時や急速に暗さが増すや、黒々とそびえた連版の山を車窓から眺めていると、尾根近くのとても高いところにポツリと人家の灯りがともっているのです。少し行くと、やはり尾根筋にまたポツリと灯りが見える。実はその以前に紀伊半島の山中を移動していた時にも同じような経験をしたことがあり、そのときは単独での運行だったのです。「なぜあんな高いところに人が住んでいるのだろう」と思いはしたものの、そのまま行き過ぎてしまっていたのです。しかし、今回は運転してくれていたのが地元の人だったので、感じた疑問をそのまま問うてみたところ、「あるときは日当たりがいいからですよ」と事もなげに短い答えが返ってきました。車を走らせている道のまわりは若干の平地が開けていて、一見暮らしやすそうに見えますが、まわりを山に囲まれているために日照時間がかなり短くなってしまうことは容易に想像できます。それに比べると、確かに尾根近くまで行けば日当たりはよく、農作物の生育にも都合がいいわけです。山間地ではこのように比較的高いところに集落があり、尾根道などアップダウンもたいしたことがなく、集落同士の移動にも便利なのだということもそのときに教わりました。

日当たりのよい高所で暮らしを営む

山村の疲弊で失われるもの

いま日本では、山から人がどんどんいなくなりつつあります。「過疎問題」とは、1960年代後半からの高度経済成長期に山間地から都市部への人口流出が顕著になったことで生じたものですが、その頃からすでに40年が過ぎ、現在、多くの山村が過疎どころか「無人化」の危機に直面しています。国土交通省と総務省が2006年に実施した調査では、過去7年間に全国で191集落が消滅していたことが明らかになるとともに、今後も全国で2643集落がいずれは消滅し、そのうち423集落は10年以内になくなるとの予測がなされています。いわゆる「限界集落」とは、65歳以上の高齢者が人口の50%を超え、冠婚葬祭などの行事や共有林の整備、道路や水路の管理といった地域社会としての営みを維持することが難しくなった集落を指す言葉ですが、現実問題としてそのような集落が増え続けているのが山間地域の実情なのです。

一方、都市部に目を移すと、例えば東京の六本木周辺では相次ぐ再開発で、仕事や娯楽、生活の全般にわたる高度な都市機能が集中した高層のインテリジェントビルが林立し、昼夜を問わずに大勢の人たちが行き来して活気にあふれています。そのような人の流れの中に身を置き、鉄とコンクリートでできた天を衝くような構造物を見上げていると、今さらながら、都市と山間部の格差がいかに大きくなっているかを実感します。しかし、一見豊かな都市の生活も、それだけで成立しているわけではなくなく、そこで消費されているものは、すべて元をただせば自然からもたらされたものであるわけです。それなのに都市部では消費行為のみが膨張し続けて物質的な豊かさが謳歌され、自然の恵みを生かすことを主な生業としている山間地域が疲弊の度を深めている現状には何かしっくりこないものを感じます。

このままの状態が続けば、山間部の地域社会は過疎と無人化の進行により、人が住み暮らしてフィールドが極端に細小していくことは避けられませんし、それによって、自然とうまく折り合いながら生きていくための知恵やその地域固有の文化や風習など、多くのものが失われることになります。もちろん、これまでにも社会の変遷とともに文化や風習は消長を繰り返し、形さえとどめずに失われていったものは幾多もあるはずです。そのことを思えば、単なる郷愁で山間地域の疲弊を食いとめようとしても、歴史の必然の前には徒労に等しいのではないかという疑念も覚えます。しかし、自然からあまりにも遠くなった都市生活の爛熟ぶりを見るにつけ、自然の一部であるはずの人間が、大本の自然を忘れ去ってしまったような営みに終始していていいはずがないと思うのです。そして、山間地域で営まれているような自然と向き合う暮らしには、やはり何か普遍的な価値があるはずだとの確信めいた思いも身内に強くわきあがってくるのです。

Like 0　ポスト

2

山間部では人が暮らすフィールドが細小し続けている

関連する記事はこちら

山への思いを受け継ぐ

無垢の木を使って森づくりを支える

緑を絶やさないために

日本人の暮らしと木

森林・林業・地域再生を目指して

事務局
〒711-0906
岡山県倉敷市児島下の町3丁目7-3
児島自内
mail：jimu@kinoIE@koo-ie.net
tel：086-486-5464

木の家ネットとは　つくり手リスト　特集　入会案内　イベントカレンダー　問合せ

地域別つくり手リスト

北海道・東北
北海道
青森県
岩手県
宮城県
秋田県
山形県

関東（東京以外）
栃木県
群馬県
埼玉県
千葉県
神奈川県

関東（東京）
東京都

甲信越・北陸
新潟県
富山県
石川県
福井県
山梨県
長野県

東海
岐阜県
静岡県
愛知県
三重県

関西
滋賀県
京都府
大阪府
兵庫県
奈良県
和歌山県

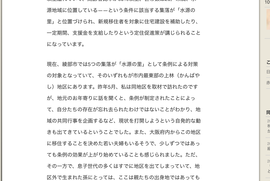
中国・四国
鳥取県
岡山県
広島県
山口県
徳島県
香川県
愛媛県
高知県

九州
福岡県
佐賀県
長崎県
熊本県
大分県

(C) 職人がつくる木の家ネット /Shokunin ga Tsukuru KINO-IE net, All rights reserved.

全国初の里界集落対策条例

現在、山間の過疎地域を抱える多くの自治体では、人口が減少する一方の現状を何とか打開しようと、さまざまな対策を講じています。その中のひとつに京都府の綾部市があります。ここでは里界集落対策に初を統一した条例の条例である「水源の里条例」が2007年4月に施行され、新たな区分の定住人口の拡成を狙ったと期待策がスタートしています。過疎問題を「村」や「町」の問題だと考えているように、綾部市のような「市」が問題解決に取り組むというのが面白く感じられるかもしれません。しかし、地方都市の場合は、市といっても人口たくさん暮らしているのはやっぱりだけで、外縁部は山深い過疎地だというところがむずかしくなく、綾部市もその例に漏たります。さらに都会のいわゆる「平成の大合併」では、市からあるさに周辺の町が対が可能収されるような形で合併が行われるケースも多く、田舎村の過疎問題をそのまま抱えているかも増えています。



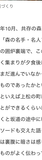
綾部市と林地のアス有標

綾部市は周辺の1町12村が1950年、55年、56年と3度の合併を経て現在の市域となりました。位置は京都府丹後地域の最北部で、西は福知山市、北は舞鶴市と接し、東は福井県と日本海に面しています。人口は約37,000人で全体的には減少傾向にあるものの、人口密度は人口減少が著しく、現り暮らしを含む高齢者だけの世帯が多くなっています。2005年の調査では2006年度末には20年ぶりという大雪になり、そのような世帯では過酷から支援まで物質することさえあるなかないというケースが発生し、そのことが現世帯集落対策のための条例制定につながったと、市の担当は、5月開始は人口減少が著しく、現り暮らしを含む高齢者だけの世帯が多くなっています。2005年の調査では2006年度末には20年ぶりという大雪になり、そのような世帯では過酷から支援まで物質することさえあるなかないというケースが発生し、そのことが現世帯集落対策のための条例制定につながったと、市の担当は、5月開始は人口減少が著しく、高齢者比率が40%以上、世帯数は20戸未満、水源地域に位置している――という条件を満たす集落が「水源の里」と位置づけられ、新規移住者を対象に住宅建設を補助したり、一定期間、支援金を支給したりという定住促進策が講じられることになっています。

現在、綾部市ではつの集落が「水源の里」としてあるとされる対策の対象となっています。そのいずれもが市内最東部の上林（かみばやし）地区にあります。野牛（のうし）、私山（はなやま）、中畑（なかはた）の3集落が、地元の有有等の工場を開とと、条例が制定されたことで、自分たちの存在が示されたわけではないことがあります。地域の共同行事を企画するなど、現状を打開しようという自発的な動きも出てきているようにさでした。また、大阪府内からこの地区に移住することを決めた若い夫婦もいるそうで、少しずつではあっても条例の効果が上が始めていることを感じられました。ただ、その一方で、里子世代の多くはすでに地区を出てしまっていて、地区外で生まれた孫にとっては、ここは遠たちの出身地ではあっても自分たちの「故郷」ではなく、たまに訪れて「携帯が圏外だから」とすぐに帰ってしまうという話も紹介され、この地域が抱える問題が簡単には解決できないと現実に触れた思いもしました。4代前のおじいちゃんが明治11年に建てたという家について「明治9年には山が丸を伐り、10年に板に張ったり、はつったりして、11年に屋づくりは建てたんです」と、まるで昨日のことのように話す人がいるこの地域で、これまで受け継がれてきたものとそのような記憶や暮らしの知恵を将来に未来へ引いていくことができるのか、上林地区はまさにその里界開発にあるのだということを強く感じた取材でした。

森の関き書き甲子園

熱中マクチ、木工職人といった高に関わる仕事に関して、優れた知恵や技術を持つ「森の名手・名人」を高校生が訪ね、その語を記録する取り組み。各年・名人は国土緑化推進機構が毎年100人を認定、共存の森ネットワークが高校生100人を募集し、林野庁、文部科学省、国土緑化推進機構とともに高校生の関き書き支援をしている。2002年にスタートし、2008年までに名手・名人、高校生と600名ずつが選ばれている。【その映像をご覧ください】



- 森の名人から関き書きをした高校生の声

ほかにも、

- アツシ織りの名人を訪ねる。
- 竹屋づくりの名人を訪ねる。
- 「森の甲子園」を経験した高校生とOBが森づくりに乗り出す。

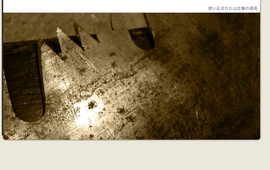
森の生業を伝え聞くことで見えるもの

山間地域には林材の生産や就業が、木物物づくり、狩猟、川漁等々、森の恵みを生かした生業に従事している人たちがくらしています。そのような人たちの中から毎年100人の名手・名人が選ばれ、彼らの技や語らしの知恵を今日り100人の高校生が聞きしてレポートにまとめる「森の関き書き甲子園」*という活動がNPO法人の「共存の森ネットワーク」によって展開されています。名手・名人たちの生いろいろは、何世代にもわたる年月の変化を通じて継承されてきた知恵や洞察力、そして技術とを結合したものであり、人とという生き物が自然の中で生き抜くための「術」（すべ）そのものだと言えます。それらは何でも簡単に入手できるようになった現代社会においては、卓越した技術や手技の活えが「業」さえもって認められはしても、ややもすると豊潤な価値は人の頭を悩ませられるかもしれない。しかし、自然の恵みを生かすことに人の暮らしの根源があるとすると、山間地域で営まれてきたこれら生業の技には、普遍的な価値が秘められていると私は思います。

そのような技に1代限半という多感な時期に触れて、高校生たちはどんなことを感じるのでしょうか。作成されたレポートは名手・名人の語りをそのまま語ったものですが、名手・名人の語を聞き、それを主とする作業を通して、森という存在の意さと、それに向き合うことで育まれた思の自覚とが見えてきたのではないでしょうか。ある高校生の感想文の中に、「ものを作るときに、自然と共存の事に気付いた。」という工夫ビンドーを交えた語りロにュ一モラスな響きを感じたものの、内容とは裏腹に深さは感じられず、むしろ自の暮らしの様かさのようなものがくく伝わってます。国伊勢を題材に参加者は身じらずもがいて関きみるばかりでした。その中には関き書きに参加した高校生のOBが多く含まれていたのですが、ふと気付くと彼らの何人もが自分を真っ赤にして語り手を見つめ、中には涙ふれる涙を手ではぬぐ。自分でも関き語らずまいとの思いがこもった、自然と共存の暮らしには、やはり人が生きるとの本質があるとは思います。その意味で山間地域から人が減り続ける現状には強いる問題は大きいです。その流れを断ち切る決め手が見出せないなら、やはりこの国は、自然と共存の暮らしの知恵を伝え聞くことの本質が失われてしまいます。その意味で山間地域から人が減り続ける現状には強いる問題は大きいです。その流れを断ち切る決め手が見出せないなら、やはりこの国は、自然と共存の暮らしの知恵を伝え聞くことの本質が失われてしまいます。

LINE 0　ツイート

1　2



名人による木工コトへが安づくり

昨年10月、共存の森ネットワーク参新県の木曽・上松で開催した「森の名手・名人フォーラム」というイベントでは、参加者の人たちがくらしの国伊義城で、この地で育く林業や農業に従事してきた人の語を聞く集まりが少食後にもたれました。そこで語られた話は、機械化が主流とされていなかった時代に身を生かった業がいかに大変で幸いいものであったかというものだったのです。「あのころの農は、みかいえ工と的の町に飽かだ行くことだった。牧を上って家に帰ることができるくらいに酒の量を調節するのが大変だった。研究がつくと収穫の過半に転がっていたなんてこともあった」といった工ピソードを交えた語りロにュ一モラスな響きを感じたものの、内容とは裏腹に深さは感じられず、むしろ自の暮らしの様かさのようなものがくく伝わってます。国伊義を題材に参加者は身じらずもがいて関きみるばかりでした。その中には関き書きに参加した高校生のOBが多く含まれていたのですが、ふと気付くと彼らの何人もが自分を真っ赤にして語り手を見つめ、中には涙ふれる涙を手ではぬぐ。自分でも関き語らずまいとの思いがこもった、自然と共存の暮らしには、やはり人が生きるとの本質があるとは思います。その意味で山間地域から人が減り続ける現状には強いる問題は大きいです。その流れを断ち切る決め手が見出せないなら、やはりこの国は、自然と共存の暮らしの知恵を伝え聞くことの本質が失われてしまいます。その意味で山間地域から人が減り続ける現状には強いる問題は大きいです。その流れを断ち切る決め手が見出せないなら、やはりこの国は、自然と共存の暮らしの知恵を伝え聞くことの本質が失われてしまいます。そのこれを断ち切る決め手が見出せないなら、やはりこの国は、自然と共存の暮らしの知恵を伝え聞くことの本質が失われてしまいます。そのこれを断ち切る決め手が見出せないなら、やはりこの国は、自然と共存の暮らしの知恵を伝え聞くことの本質が失われてしまいます。

LINE 0　ツイート

1　2

使いはされたは山里の農具

関連する記事はこちら

山への恵いを受け継ぐ

無垢の木を使って森づくりをする

緑を育やなくらしの知恵

日本人の暮らしと木

森林・林業・地域再生を目指して

事務局
〒305-0806
岡山県南東部つくば市下広岡1-5
TEL：080-6966-6444
mail：info@kinoie-net.co.jp
fax：086-486-5464

この記事のタグ
日本の山林を守ろう
赤城関森の林材レポート
同じタグがついた記事
2010年3月26日
林業が楽くなっていくには、何が必要か
2009年10月29日
緑を育やなくらしたに
2008年3月30日
「子育てを楽」してくらしたこと
2007年4月25日
林材フォーラムでは・赤城関森の林材レポートは何が目的、それが本の家
2006年5月26日
取材・関木者一さんあさひ製材・山の木を活かしたの接続材
この記事のタグ
日本の山林を守ろう
赤城関森の林材レポート
同じタグがついた記事の記事
2010年3月26日
林業が楽くなっていくには、何が必要か
2009年10月29日
緑を育やなくらしたに
2008年3月30日
「子育てを楽」してくらしたこと
2007年4月25日
林材フォーラムでは・赤城関森の林材レポートは何が目的、それが本の家
2006年5月26日
取材・関木者一さんあさひ製材・山の木を活かしたの接続材
10件のビュー
11件のビュー
11件のビュー
11件のビュー
11件のビュー
11件のビュー
10件のビュー
10件のビュー

© 社団法人NPO木の家ネット /Shukurin ju Tsukuru KINO-Ie net. All rights reserved.